へ 5
6612

ヘ5
6612

早稲田大学教育学部図書

87859

<2000-332>

増補方圓発句集

岸良之編

えりや恩恵しく手も孫の上
えりや玉を囲ける人之詠
えりはかく二りの結をなむ
東都ハ大阪東海よりむて
一の山を後まで此今様ハふる
ままさくま

早稲田大学図書

海山のおくゝ迄しやちり落葉
花陰やうそ寒く来るかさ
鶴なくに老の名されみゆられ
酒桜乃春の折くゝ何やあらぬ
こゝ日たちぬぬ晴て青山あり
をとなきむ
みちの空むら時雨にみゆるゝ
落葉やなすてあら井戸の音

人の行くに代るゝ家のとし年
きゝえしられ
古きもの家名ハみかて花の春
古松の春むかへる人々の
おとふれを待ちて
祝ハみえ来将軍ら礼記あるい
和歌　大川茂
みとりや頃も梅の人にかいろ

たつ鶴やまみち入ゆる狐まく
きこゆられよあつまる河鵜
えりいりたるやて起しける
伴ふ人もやみれなかれハ跡る
眠さ見ゆ
傘にゆるおもてをはらひ雪
芭蕉　以粒
ほろろんやおきて見る紙文の枕元

芭蕉や都をちらす海士の塩
新玉を祝ひて
ならんの山よおさへし松のあれ
旅人の捨て来る松のあら
都のも女松にお隠の花盛
尼稲　古笠　難菜
仕保姫乃ちらし候の花乱れ候
招く法くおそも一句ひ

辰(?)藤の香やまつりは清めの綾(?)返
三十路まてかゝりてぞかゝて手
古今(?)まなまなをむ文
ゆかしさに忘れぬ名あり橘木(?)覚
稲寿子
稲寿子く清くは見えぬ新(?)返
氣(?)むかはりゆくてぬるたし　稲寿艸(?)
古(?)留(?)綾(?)

菊(?)宗　偲(?)信(?)浩
清(?)きらや流(?)の古(?)光(?)は色あきき
帝(?)中(?)卜辰
菊宗の神子をたもめ戸口ゝ余
万宗や清きかくしに古(?)圖(?)ち
やんさらのそ川ならと永錦の氣
古(?)きゝん
至(?)人の中よ菊宗かたる(?)寛

出替

須磨の浦人又おはしては出替まれ

の出る日ハ見ちへる清替とる

室の出来ハ

うきつらき主の勝も出替ハ

人る　小松氏

人のうとおもへハをくれ出替るを

明ちる日ハうちかへやかみのる

見え行そそみて川よれ小松うちま

まいくまの出来やにやまへ引

正月のちらく葉あふ小松氏家

茶杯ちらしくものハ紙乃袖

に紙たきおくる紙ちれ

ゆくる袖なくてハいや小松氏

蕣葉

先人のちてろちとも中す出るあれ

買ておと戸はくれしかうふかれ
かすられてこそつゝまや花菖
やうて春の菖蒲をやれ秋も作
あるそ弾てもかうふまをつやきの家
忘井にちらくうくやとうふ暦
清む紙もふくて窓しくきかうふ作
○郎おにけるらんく
▽花なつふるすかいかゝるをとこ縁

▽是なうへ縁でも来るかね仏の坐
▽ちくはの房にえらうてはくこうれ
鍛冶をふれのかれやまけられ
しれうつしんく
すせくと世もいさふかうふ案かふ
実ね　守めぐ
人の親れおねねすあもそこ
ゆうにあるをむくつ畴

柚子実や行のハみやこを見るさへ
落生やり寄せておろす風呂の香
かゝるゆへやゆへし行き銭なしに
言るをしておとつるやかなしゆへ

やぶ入

やみやきのうれしさ知されつ

無名

たゝかうき雲の峰はる雲つく

梅

梅乃月ちらで見れハなつかしき
うめ咲や格く出くうけ乃まる
祖父乃国ハ呼すみもなくて梅の花
おもきれまてちれなの梅の花ふ

かく

千代まての枝まとえれた枝に
鶯やみ春これハうめと春

述懐

さる梅ハいさみ乃なれと泪かれ
此端ニ元気ある梅や咲ニ乃ゐ
苗うゑて留守ハうりうゑ女来る
くせ有て梅ほもほや新紙竿
何ふ見れハ梅掛ケて待つ梅花
家あれと戸あされあくてみる梅かな
妻ありハ行そや手毛しあれハなる

字出ふし第え入こむ川の宴
妻のうへいつそ出見ハ山の月
人たるさやいつ家乃梅九月
咲く絵や銀屏ゆつ庭梅のそひ
聞えるて折るや小窓ニ月と梅
梅かつく一人ませ国しわくしみ
いつやや垣のちらしうゑれ花
迷ふや細見家とうめの宿

花実とも梅も清めくれなゐにこそ
きらはれし香なき川の梅の花
垣越す梅の先見えず紀
目をさまし妻はろくとさのれけり
南可 笑
維象に梅のゆきぬる蜂の巣
くせ清いて梅にうつれや露乃雨
伊賀の國尾山ちりて露きて

山寺の庵にひく梅のみゆるかな
外の雪深やふりきぬ梅かな
庭前に清まり来やうめの花
うめの花咲きそみしてこぼれきらん
星霜 清示
手折るにはむかしの梅乃まづひらかれ
出けさの岩屋の小家や梅の花
文寿 記之

すみなる経乃きなわ梅の影
野も藪もかくれ山のうめ白し
茶の木も気力ありけり梅の中
はとゝはゞ折あれおや梅の月

柳

庭掃きてかれよきに見たる梅の花
人にうかるゝ若さ吾薫かな
旅人と隣りとつくりたる梅の衣

宇治にて

梅もの隣をしらぬ夕やみき
高むら隣をもとし乃梅の御
こゝろくしく梅の高をかふもなわ
ふるえに梓すゑくの梅の花
梅さく折る花の折をそれしなわ
また梅やくえこみしみなき枝
柳あるゝやゆうふたちかな

嶋の崎ふかくに朱なる梅の舟
石蔵に浮し梅も見ぬ花さかし
加人
梅原きくを驚かん香の末なれ
河梅さけ木にかゝれ梅の面
生の巣梅をうつら斜になる流
茂雅
梅くて見れ行かふ徳の備

春らしく梅まくらしはらく河堂
大名高の塀を入りて見ん
今日ある梅をおしまんか
面の白い見えみる友川の梅なれ
梅さけ斜なり花を心の橋
鶯梅舎雅席
咲きいやおきたすかさくらなれ
三本ふれ垂れまさふるを　梅水

見おろさし梅さへ花る泊うれ
山寺ゐのせんさく年の暮松
我谷
わらぢ乃草末をかゝし松ゝ
谷蘇て
塀ごしのくらい行くみる松の花
鉄谷
残雪八袖ふれた松に柳かな

宗寿の祝ひに
いとまれ枝まで延し松の花
松の花
栄宗之茂松
霞引ましたゆみしくを松の色
不然之賀
花咲てあとあし子るか松の下かな
常雪

うくひすもねられぬ鶯かな
鶯も法いくよやるそ鞍
鶯なりや二十見てハ見てくなる
うれしさや人ハ何時来てぬ里
鶯のくせ見えぬ勢ちらし
鳴とられ鶯風をたしろ守
　写塚中田さらへて
鶯なるの鳴きが降しや小枝鞍

鶯蔵乃鶯歌を鑑おさめて
鶯も来まのふ二十五日ある
句やいうらむすあくの来ひなゐ
鶯きれハ鶯なる海るゆかくうれ
うすらむ花も山あきゝ野にもなく
うらむすやおうと鳴ねハなくぬる
鶯もおもゝく守時の時けるな
よくすハ鳴くひきて来殊のおく

尾をふるも露をこぼして鳴く小鳥
露や雲にからふる一羽づゝ

紗綾

うぐひすの声きこえて信濃かな
かきつや松の中なる松の花
うぐひすの声きこゆ桜かな
日まれに家を出る子
ちるや川をわたる花と

蕎麦の花

さくらの花より咲きかゝる
露やそのまゝを花の中
草臥の影
露やその垣を越ふ年
うかうかとたちのぼる秋の月

桂

さくらに一筋のかげ山のみね

梅か香に鶯啼はさまて落かる
梅落て池のゆふ日ちる也
梅あらて釘やつるしたる枝
半に隠てさえ戸はきて落梅
ちる花の子ひまるけふ人
ゆかしる
手にもんしゃ八手の梅香
古梅乃賀

古

花さくやこゝしもおらぬ梅杖
池に浮てそゆやされ今日梅
春月 縫て
一夜かる宿も庭されさの月
人たるましなめくしなの花
何にま縁やいまはやちるの月
人あるいふひさかやものく
山ともやちらく竹に春乃月

おなじく

宮こそはいつまてかおほかる月
心澄や雲ゐつなのおほろ月
古梅に飛なりしかねならつれ

宗如

塩屋にはあまりとのなき霞かな
一筆田やかかるいもとの様乃なわ
くまれなて流さくろりつ宗鷗なる

通る人時鳥なるかすミこの丸
文経して
とふかひ錦の延ぞ住まや舟流
観風紙雲あの春
一葉やし出来も猿めしみ雲あ
那絵 宗雄
紙に明てなれえぬと仕什に分
ましゆくえと風来るや爲の弁

山陰の田にかゝるゝわきしの露
春雅く滅候はつらぬきゝすれ
ゆきしのきゝむや出えを論ちず
江ふくや里の竹とられ又遠
小屋附ゆくんなえてきしのこゑ
地よたれ八笠みてひろむ雲を紀
　安ら中よめそ体ふ岐も足ゝる
山えるらはちむする　念し

高きのさとのきとふもはしなる
野末ちるんおろす乃きのやまそれ
去ん新田あつて乃句なる
　其角
たふれ木に添てめぐるや其の松
其の田へすゝむくりや山乃家
　其雪　随之
浜色や外風にころする紀の内

はる霞やくもゐにこえる雁の子
かへての葉はてふ紅葉にいろ
そ細くむら時雨の雨流気を
くわ野よりのやゝすれは深田
に落ゆらんとおもふるに
木かくれにちるゝ葉はの春也
春雨し菅野松の深みと探
池深く落てあらちの絹さらす

ちよのふこえれあふみて錦をみれ
ほそ流の枝にこぼしれ錦をを
春雨 春風 梅を
春雨やゆれにあわさらず春雨
一日の来る雨のたよりにきそあ
春雨や枝のうへにゐるの錦
若葉木をさらされ流るゝの雨
見ゆらしく小松うつやまの風

河國にて所得

この縁のねもすゑやさの紅
まそゑやわきられらねるも形
うつ様くうゆ竹乃るう枕哉

猫の恋

ねこまぬ只むとまの只ひより
子思のもち雲あくもわらぬ牡猫かれ
身うちむやちのひ迄しさるふ猫

ありくれ流るゝハまうくや梅の恋

白魚 吟

ろ坊の白魚濱のあかなさ
白魚の眼よもこゆる不二颪
冷や江戸あくれい京の春

海苔

此浦く来て海苔のあまた海苔ゑる
乃ちれまつや陸まよりつる僧二人

清音のまれ物ても鍬ろ一字なれ

○菫　菫菜　菫子

▽野にたちみるもにつむ菫かな

▽紙のみに菫をのせて手をつれて

▽石に乃すられつみ折こそれ迷
かゝるの色を摘室に給て
白く生の出ぬを歴と組す

▽健気なるわさは隆春の菫かな

採るを惜む

▽むさしのゆかりや塚のすみれくさ
まろみきるみ墨入るを
清めるゑちとて本のく
みゝもて法ちのをふ物よ
むのさ由断れいふるへし

▽うす紫にて清まされ花わ

▽山かるふしたんあのこかの原

なの字のめぐみ通るや盤ひとく

　　翔縁壽の阿星ならゑは

夫の字ふむもいのちれ築かれ

○歳

歳をれといふ家のころ歳て家

存くみる我子歳つむり姫の人

　　仁齢

田鼠や夫まうらみれ衣かえ

　　涅槃会

凡人の森まありやましねぐる縁

ちしらへて法や涅槃のかくしけれ

　　陽一丁　芦

なれとて存分に入あ一人の露

田をめぐく梅ふくらかれ陽る丁

一ねつて宙に阿ろかへるつ

ちの耳すわあて通す花それ

あはまさえらけぬ蝉のなくなり
しるやこそみて君おもふ梢の中
をあ中のしらぬ兄弟しをしる
まゆや立ちまつはれ流るるあ
秋来る野にさゆるよや秋の露

蛙

風そよくつく柳の葉なる水の蛙
物からかはの二葉に得る心

野の末に水辺さえて鳴くなり川
鳴る夜て月は見えぬやなく蛙
水田をはなれゆき水のなかれ
子供もちて鳴く事なれ蛙の声
樋口からあふれて出るつくつくめ
井も桶も水すて蛙鳴きおぼれ
田の面をすゑ流れてはなかなか
そもくもすゑはえまくてなく蛙

聞たてゝ謡をば申伝ふもの也
またいふて衛をうらむ也
嶋 因幡
色も香も持ちも下河原
名にぞ嵯をつゝみてこそむしろ作
わすれぬ縁を流に語る
學まてはなるをかくして
名のみ縁の伝ふて留まりし

三つ蝶の様うつせし因幡かれ
菊代 菊の花
垣ごとしきのといや松の色
玉の緒や緒をの松を果らし
○菊の名やなれ鶴は秋こ
老はたる鳴と家まて
なの名や豊寿の鶴乃声
○菊の名やいふとよ流の末

よの花と咲やよ流る川なよなれ
春の花　能
さし枝のまゝ咲きぬれハ梅の香
ふえを植ふるに伸らちて梅の花
こと
人のよにあれハめでたしものゝ香
末せちのまれハ春まくまちやまれ
芽咲山に植ふるハ皆生の

三日なるまでなれハ
みよし乃ハ里みても梅の花るるゝれ
歌人浮経の事なにへあるりつま
誘ひて志るまかゝしてふ春
わって世をすまうきあわそゝ見
呂川うらみ事に流されて父の
風情を読んとまめて
花枝ハやさまされとそくのまま

雑　洵千

世の雑のはかなふりしきれあをも
みそれはさやみとくと哀なる
六哭生のかけしをうる雑にも
秋風とほうせのふく声をも

花　さくら

さきうつろやて入ぬをのこ哭
よの風も身しかに吹てむさらす

あもすくみも眺らきて花かな
ちるみ人あらすなれあの花
いつとなく花にあかなる峰のち
色おはなりくもの峰よれ
見しみるる花はいろくやむの中
様もしきのこ人ひとあさみ月

待花

むとくそふらに花咲峰

嵐山

をゝ松ゑひとゝくまむらひろち

日枝翠

をかみやしてゝ山ハなしふ

白針鴎

ひとくちふし時きりし筆

朱叙山二る

洗ひやうし纏きくや宮の市

陽人の大袖ふりて花くる羽

采中

いく利光をにくや花の夫白の音

それくく人よいをせてむへうれ

十菊亭十四翁

菊おくおもむ返てや花のはと

秋花剣舟云

行くさなる光須く来月とも

かしまの社に詣てまつるに花の
梢なるを見れは
なかあかれもはなちし神の梅
大はなる錦山の手にひて
しとれ
併もむかしに来つか志賀の山
京にまかるとてそのさとの
酒店にて見えさるその人に謂

をかはらん
松かまにうつしろなしもの中
世總
宗因庵に探題して花をうくれ
堀木にて似やる梅のおに
うちまれ日もきくまれ妹かな
にほふや橘もおけしもおもの梅
竹の葉ややくやしかくへあふまう

戦く競く深淵
花よ眠のちりく渡りかし丸木橋
朝顔あるてもれさふれ女かな
わたくしは行きくし出ふ風
難儀のみを務ふといへるに
後もせぬ心乃息し花るるを
あら面様にて
みれりや牛まへ出ゞ下さ哉

譬へたすれは必ず無ひ至ると
かの目をうれきて深かる
清洗の画に
若吾はうるふく突目おうしけり
相くれいもはたりけや一ちか
流くれる桜の影す
雨あるもやめくみに入るまくらひ
後の句花情生ぎのはいたりの

志ゆかしもきえに求さへ給ふ
てくる隅田川の花のころ
いろかりみてもりふやとなる
おもふられてなふれも妙に
一句をよめく
まほろしおさるかくなふのさへされ
此時の法は佛法あれいさは
かの妙経あれい菩提なりと

佛あれい衆生あり衆生あれい
またはゆかり佛法あれいこなる
ことわりをいかくなくすれい極楽
ならぬのいらし
妙経をきゝつい花の此あるを
あらはる人のものをころ知らさる
ありくしさを残る後の妙経
本経にいまや深なり和佛なる

白雲にまかふかたの桜かな
芳野をまことに見まほし山桜
藤原皇后の歌
桜かりハとしとうとハいさくらかな
白雲ハ峰や杉山かすむ山桜
花見にて人にまつしる桜かな
錦ともせしやまかけを桜かな
明日ハ散人さもれす花はなし

人ちハ一ゆふみしてちるさくら
年中
見かへりゆきされて行桜かな
嵐山晩景
人のゆるかへりハまつす夕桜
余所ハ雲の中かへすまさらし
それ見ゆふしやかうてはさはさ
花生の白堂集

子ハ云ことたちて故國に帰れとは
かくしりそりて得ふちとけ
いはされハ韓愈の昔
もむなしくてうきをおもふを
すゑを尋ねてしむに情話
おのれハ何ゆゑ利をもとめ夫
まづ一書にこゝに又一書鐘を帰ふ
して読に生書字を定め

いむ六ヵ月と料えるの心づき
はるかに経すぎし常戸ちの
松ハそもりとやみや越後の
吉本の里にて猪倍ちれ座
入様ハ萬代の大様にて
家をはなれて侍し
要なるを寺まのさける
ねるとも一所の縁をなすは

ちられとふりまかへて見しも雪よ
なりもしらへてもおよい次
まてもちおみきたるものを
作つてはるれ乃ふ子
そらふく乃あれハ見る
山さくら みはるかなる
法すれるふ それさうかれ
花ぬるを いさとの秋て

なかむるに 見そ清ここれ
そうまそて行かる

源俊家の書士写し北の方源光延
若付の時乃袖かへしの短冊よ
みやこ見るまゝにりんもつゝめれ
秋のおもむれ 枝やそうへや
ちれぬ組を法てもける
ちるまての武きそて俵ゑきそらわ

渓叙

浅草の鐘乃音たえ〳〵春風にふき
山吹のちれる夕の小雨にぬれ
柳も吹れぬらるれとて若葉の色
むさし野や宿やむらくに山住し
　宮ヶ森仙樵叙　長蓮清珍
隅田川や江戸の柳のちり乃茎橋の名
まつの山高くとふれて時にはる

山にて紫しよかす上草のちの名
　湖南　俊人
春たちし年やう御清水にかの麦
小吹をとり花ゝ人を頃
乃隣は長き人たちのちりゝの乙
ゆく春やいつ頃を見ず小雨の絶
見るよこれの狗鰹とまての年波名
　撫濤　渓叙

雪中述懐

雪乃うちの松ふく風のおとしきり家
さ我ハ家にこもりゐて出しく福かなし
我か楠乃妻
なまる時をもくしくもの雪ならね
梅かこゝろにてもちとうしまの雪
ちみ猿乃小猿にてかけは咲ひ
きとをまつのあたゝかのかひて

重信をとりて先ハ佳気塩部
小さき人紙乃ふれのこむそれ
かゝれに信さるまなおちくて
庭の梅にそえて強ひ梅の松
おきなの宮松も附ゆるを
若緑のことを降しる松
わかあれはさしなき松の縁そ松
さきへのてみえてとさお松を

ともかりとなりけり

冬の頌

并にうへ

太郎より次郎なれどもむかえ

網吉のあたりを東気に文在

懐包よりかれくときる輪にれ

輪の経て千代もうる御まのにて皇

餘まるめかさ博りゆる輪にふ

試にひくあてもなきはゆみなる
梓弓を絃にしはなちをぬ
空にまつはらせたる川に
花清き神の葉ぞもる秋に

卯月　経信

藤なみをとこそ寄する白雲
みる色乃字も花さく卯月に
ちんくに梓弓清あるうつきぬ

我おもて

経信のあさむつ川を埋れぬ
みしかよやきのえの草み一ふし
こし方をしこ浅きる流にぬ
明るれ夜やさと里縁の端に

子規

久かたや雲居遥かなれて来
鳴うちててなうさら鮭もとれに鳴

時雨なくや清く川ふるみの人
ほとゝきす宴もまみを十文字
　隣雲写ニ宿く
子規なくや屏風ゑき山書
東ニハ山ほとゝきす飛ぶ月
鳴とて又木隠つふめ鐘
　生田
麦深し布とまさきん菜な峰

梅ほとせつれて鳴ぬなくまけ
むかふ山人家さらぬ風や時雨
従て端るなくハ東しなし子鶴
松子風その葉じゃとふむく板ほて
　生仏坊よ乃家アて
　浪花の俳友ニせんそくこせら
　引返しニ
松そうのみわゑよ急ぎて来れ

淀の舟里にて
河風やうす月みちを枯すゝき
ほとゝぎすこゑと聞れ得かて
夢のかよひこの手みしといふに
うつし世を探紀悩れる紀
念きて八雲なる空有時の
木戸さして塚肉ちんとむかと都乎
子紀なくやすめる紀岑はゝ

大津にて名なの花やう
なにはのる乃二あき三こゑ
鳴てりうひうる声秋くしき
たゝあらに覚えて
なふるむおかふ夜井を杜鵑
何沢まて
あらし見雲山の言とも都守
故
故き
叡帳

ふひとを咲て浅茅に咲花ハ
京都をかめて是花にさくれなわ
茶屋
花ハおろゝ花もまつや磐の花
是乃花やれのかみかし国
懐古
たふひまて流なれ浅きの花を花
白雲乃中くるをやくか宿れ
文它

大津夜泊
かゝ鳴と矢橋を花盛の錦まれ
はくえをせ丸ハ見られす花盛の川
花盛つれハ花もおもひ月まれ
人もみな花盛よ日乃さくら宿花
橋つまて桜のまゐる物ぬ飛
牡丹
世をかさん高くみて咲ぬる花の内

吉野に咲なら花ぞ牡丹かな

成田に勤て深川まで宿施

残るをぞ行くなるなの花

新古の作

千世経べきふかみ草根をとくも牡丹花

こゝろよく人かるゝなしむ花

かさねてあまくはるやはかなん

咲ぞふかみ花を残せ乃作

春己

牡丹

人はいさ華なりにうきつゝも

宮代のへるにさかつきや牡丹

ゆゑ名をもて我おもふく牡丹花

みなのちる紫とわが思ふ花

いつまでも咲きにほやかなる

見ほめて華なきはやかきつぼ

あまほうや汁するゝあまなむ

此邊りハけふも咲らむ撫子哉
杜の露てはふきハ見しれなり
撫子の花
露もなれもかゝらぬも撫子乃一夏草
常一乃色る光ひま於しく枕え
強くハ風をかつきてやらしのむ
瘦まり庭の撫子を更夏屋
今乃やあ満て行きて注るハ誠

宗六

さけさ斧子安く往て後生なり
まれあハぬやうに詠くやりしの家
花の夜乃ことまハことりしぬき
心理のおてもふし安業の色
まれあるく安のやましきも一読
菊紫や々楓
年きふの末孫乃さまる安なまれ
要なされ様往る御修すわうそまれ

花も実もおちて梅の若葉なる
見るみるにちやとえたる柳哉
椎くはにわか葉うつりて又ねさし
　是唐乃かく
見わたへて残るこその梅桜
一さかり盛山ハ若葉にまきれ
老木の梅も三とせの若葉哉
金色乃仏にうつるやわか葉哉

跡ふみし待く桐の若葉哉
子葉ふわ奈くて若れも若楓

茂

山寺乃しれ庵ひとつ茂哉
たつかれ茶茂や堂の精舎
おしなへて梅も増ゆる茂哉
宮やかハ花しかれとも茂り哉
見なハ小もこ深きへしまさかれ

うれしく小池の小嶋も我なれ
江戸庭に二本植に上れる
と唄はるゝ其面影の古墳有
あらはれて
親と子乃二本植れし塚なれ
武建霊社清水
われ入て名けきを偲く我なれ
武建霊神ハ宮家の宮に仕へ

し小西長兵衛射作連乃霊
我宗に参るる社ハ熊野宮北
来迎寺といふ禅刹ある
神花乃歌
花そめハ梅やさくら乃我こそ
常住松の枝近時
願ふ来のハ泪まかり乃我かな

雲除ては峰乃月を
ながとくへも村雨は潮風に
落てかゝるふたゝひくもるや
峰越にながれを告て行波の
像たちを以てすにながぬ
かも流行がるむらさきとをみやけ
高木を
うれ世をもおもひつくはや高木立

義仲ち会式鐘与
かくて遂ハ出雲をあら高木を
節のを百舌揚る
秋のやハ人かハ聞て流れくを
うのをともそへて来しぬ彼岸
中の秋て移ゆくや花の庭
花なひける人やふそをなゆりれ花
秋のふえくやれちむくろふのを

おほくさにゆきも晩星なり

敦盛乃墓にて

ふたつこの名は咲よし一の谷

松魚

鎌倉ゟ引さけし里初鰹

庖刀乃血をみるやさかなくされ

見おくれハ小舟のぬるうもたちまち

さけ鯖もうれ残りもち初鰹かな

蝸牛　子考

蝸牛閉るてむや篠のささ葉

うつろひやせ葉の末に白

露入るまておちはして蝸牛

かいつかるを角ふるまいはかなく

晴えとこのるれきはをおもへハ

蝸殻すかるかふとはえ世に

をおいてはらはおもひるかな

乃くさをもつふたゞよふは
にほひそめし
うき波に扇子かざせば水かふ
からすかも隠るゝ露のたまかれ
人跡乃居するは伸んとすなり
といへば
子子ふみのちりにけれ
竹婦　堤雪

子子よ月何ぞしくて火氣そ
ちさましやふ湖のみちにこるそ
竹を携さへ来るを来るや竹婦
堤をいふ時はちりきれんこ成
おなじ羽虫のほたるや飛蛍子

蝙蝠

かはほりや身に蝶つきて竹の枝
蝙蝠やちる柳の裏乃空　かきた

老鶯　千里

鶯や惜まれくさへ我も老たる
音をのみ鶯もはや老ぞ居
の聲きく余韻に筆を借て結び
止りの内にもたくみなれ
そやけなくて鉛なる面影に
身やはたく我惜殺に鳴くなれ
いさかれぬところやこの面影かな

かんこ鳥

さびしいはさてたくさむや未熟
の笑に似た声のやつれた鳥
峰の森にて一日鳴やうちむこうの里
雨枝の葉も後の里の深緑なる
声たえせいとしみおとまて隣家
ふもとは一夜もこえれ深たる
竹とかきんうちしねかくりかんこ鳥

待宵をしらすや
困みることけふも過れ十日月
なましひに明れぬるそかなしかる
鷄鳴
毎ちかふにさかひはし鷄うれ
うたひの間くいはれ霧し嫌こし
鷄もふゆも隣まとふてるまなち
蔦の葉れ木風にまかす 野川女

まつ浦 りとを
春雨のなくやまさる雨
梅 梅と又降ても
まはきの松にあらへし 梅なし
見へかや続きつらぬるや月に子
行ふそ笑ふるとも多き鷄
芸子
親に似て月につきかのとうれ

来る月あてゝうきはるなくお

筆　茶子

いつまてそ竹のまやまふさるかな

竹の子抜たる跡の縁や人たるを

筆やおろとかうなうさえんと筆

籠の月をわすれぬハうれて扣茶子

石もおほき松に行さく茶子それ

青梅　和佐登子

玄吉

実になれハたれもおらず萬の梅

青梅やわふとしいろ〳〵の枝よ

青うめに塩のきえむ秋の櫻乃よう

抑き子成先そろ人もゆむ

まのむらかれ泡とこほて夜気系

早苗　田守え

ひの日を捨まきて早苗とる

身に添そいよも悦し早なく系

植ゑたる苗や見えてのたちぬく勢
浮き沈み年々のさなへも植ゑ得ぬ
植ゑあれど押すいさて早苗舟
孔をかくす浮きやうれき田植哉
浮きて縛る如ねる田うゑこゑ

杜鵑乃旅を送りて
笠白し田うゑて跡れゆく哉詠
竹の雫う浮れて濡田うゑ笠

五十五

菖蒲　宗匠選

▽菖ふきて香むはや菖蒲売
▽旅人の笠にやくやあやめ草
信夫て縛年を旅して
出ても旅笠にさゝれしふく菖蒲
和泉温泉にて
旅情のやつれて見ゆやあやめ札
菖蒲湯の香も浴をと近慣しく

浜宮ハ五月こそなかれ
あやめふく日ことさらなれハ潤ふれ
さ福草のまつくや竹馬もの花
角秀　幟
粽ゆふ手ハうるんある菖〻し
秋こそ海つらちようれとや粽
わらぬ宮や千葉をみるて結粽
おふくろ細之ゟ高き手のかの艘

之茲

五月雨
雲ねも果なし日松のあらそひ
かりそしや落ゆつむ峯月為
惜みし〻ほとのきり月れ
さミミれのゑん白ひや吾妻の帯
雲のひまいつまふゑのきり月る
餅み
五月きくを桃ハ二年こえて雨

さみたれも伸ふるたけをもよるかな
花のかげありせて供なころ
峰の雲の行しふる儀や五月雨
能登富山の吉妹紙て
さくら花ま角も清ふる本矢金紙
東の倒止を
いつも袖ぬれて日も行ことなかる
夜晴の松ハ見えて冬か五月雨

五月雨や東坂に外の錦雀
入梅ちれやとくく床山の大文字
行後に田こと〻にあるらん
降りて
入梅晴や田うへふくそ鼻降日
昔の花
とくし清かして
あけの朱やこ刺く昔の花

贈小枝先生墓参　享保三戊戌年

五月十二日　孫雪

古ハ吉様の流なりかはり所少からず
却夜山浄ち不心逢社諸内に至
天保ゟ今々の我甚梅田年風
従主として今に書置き稀く
一丈余の薬と玉垣を結び行
以純一労を重仍て新保を
建給ふ今ぞ需む

銘曰

今般墓ハ小枝先生ハ少年の達人也
と思仰ぐも以へ置き我を世ニ至
至てハ下流をくむもの海内数ふ
ハ小も及ず当流の將哉ときう
ふハあらし更風さらむ吉様を
再飾して今跡を継ぎあた仍よ
不調大流る世ニこれを祝ふとする

も人必ずをまつるに行はれ天より
人さりて形らしむるものなりんと
能々尊信して謹之
千代を守る神も昔の塚乃昔
讃一句
家富て人に交はれたくなりら雨
翁子 柴雨
かめにかふきとられて河里ゆふ

あつれなるに舟よせつるや花川戸
江戸ちかて
笛の花を翁子に出て使にか里
かかへ者のあつまりて其てものの
見物するとて
露をされ乃外も成りて翁子ら所
なお翁に二句
御くくなるやる白 はつ老

一本ハあさつてかん菊あふ来
酒乃ときりよくかけて菊よりな
水てくる気鉢に情を密菊りね
後もちの小芽をあてこそつてな
花の田めごこ作くよ密菊りぬ
菊
ほころびて見えの室ハあれりわ
立末りをそらをも見菊りぬ

さらなをくみえりしてハくるり第
りなて変をささ咲りそーられ
り第るをハ手不変うつも花がる
来候のよねくもつ菊有うかね
候をこ姓よ晴ハさやうよ第二の菊
候る人の栽培小
さむしくハ第段のよ錦のな中
菊るつ和中よ滞しくけかる

夜かゝる白露しりほそき秋

燈

桐の木やあめのなかは燈の影
夕露の道入るふまゝ見をとこれ
葉に露をぬれ出て燈や横へ出て
灯よ行きる燈や燈の京方ゟ付て
秋さみや葉をそふれしまよ竹よ
そもそも雨からぬまれやせるあまし

横江の葉を小て
燈よ方裁ろそて映るよ葉の松
影つゝは遠にきみ映る底ゝ影
　憧津浦ゟ京
いつ影しやせとさん秋を待ものを
　竹
雪といふ折ゝ降るそよこも竹
わか竹ゟ露おし常坐伏影堂

鼓子花 夕白

蔓ほやかつらのやられ松乃雨

咲からえてとまかみ時雨

蓮

葉のまへや吉しもしらくる蓮

夜乃月 雲の峰

つゐて来て下田のくま夜の月

物見ろ翁しさ

夜のあや川ハ流て行の月

吹きやく音も松まくてさのらね

くろかの月遊すまめ雲峰

雲乃みる見し山のきに流る川

浅縁も鴻もまかりてやのみる

東路 鹿州

まさ秋や手まくもら人みの山留

麻刈ハ流さなくおくろ葉色和

新玉　元日の事
年くらも改まりて新玉の
光清みていたゞきぬる門松
誠は天を悦びて元日の
酒のむの水いくよし元日の春
桜子　おもかし
かはらぬ君が代をなかへし小詠
桜子の離やまる月のおさまれ

阪手さくめぐみある七月十
五日中旬下旬にわかちは
雨の後らきを見れは
からきは空をみなしや七月十
清水
まては空みて諸こも清めみれ
紙さを清めたしくも里の姫
やうみて清めて入る為一羽

笠のうちゆかしくみゆる田植かな
蓮の葉て清水たまるのと
昼人
あつさりや ちょう深き漆の木
昼きれにもる見え色かな
其は活人名を記す
たつまりの気あつくん石の露
麦糠のくま吹きつく昼さかな
玄吉

涼

涼風に身をおあて、出りけり
嵯の縁るにすてし柱姿さる
老かつご此の三や 妙涼みて
鶴の音似乃鳴も涼し 岩の之
晩も侘てしいなきそ夕すま
空こぬ秋志御風
そて何の身あくときるぬ涼なれ

おもては扨ころもとる涼しかな

宗匠のもとにハ百韻を興行
風雅のみにハ秋月をも手ふ
風雅の花のくもりかゝはい
其宗匠乃松をかくまか
行きしある人にをあめて
僕行て月待ゝ流え涼し
浅河井市

隠よみのやくれんかや笠まもし
淋田にそよくやはして
松原ちりしとゆくいせまし
粉くて
まさみみをくやまいそくし
吉の　風蓮
うちみやかしまつ涼松その市
文字むく立の紅すや風そよる

蕣の露にて
はらはら袖にきたり風の音
多之
ゆふくれに出ては諸や一回りゝ
芋の葉にためてこぼさぬ白露哉
みなや見もたまらぬ 桜乃女
経て笑ふ恋てみを見られぬ香
ゆふちれも桜かる男の哉
云丸之

法橋 茅の輪
夕風のむらくまひる涼徳哉
風かをるめぐらちのみそぎ哉
ろうけきうらくくまちのきれ
懐之て
寒あして茅のわをぬけしゝ女
保和
あらては枝にさわこゝろ川哉

菜の花や樋口までも咲つゞく

稚き人の供を従へて

うばりきむの銃なれや桜の実

名所の見えんて来るやまされ

住吉の浦にて

松かけに波をたゝむや青すゞし

鳴戸乃沖をみて

櫓声や都浪もよれ鳴門沖

わか葉して人を迷ぬ竹の上

信おさく末横ふきまゝて

せんさんの花咲まくや笠のうち

丁保己の年五月十日ハ七十四二才

七回忌の逮夜なれハ春花を

ハりま供へ牡丹餅を称呈供案

を若き人々とゝもに精進哉

修ま法、ゆぬ

夜半のあらし生あれ悲しき哉
三日も深川浄心寺におゐて
寸志乃供養をいとなみ侍る
父乃霊も又母乃御あとに
をさな子に嘆して
此のうれしさすゑつくも笑の露
又
花にまて開しきくのかゝみそと

おもへハ袖も涙にかはくまも
義仲寺の庭にやすらひて
供養されと枯の花乃御かく
まれハなきかなしさの事も涙
海山のうきもあつく身にしみ
細いやれ衣ハ枯やして花盛ふる
衣更く雅にふかき身に一つ

京東洞院佛光寺上ル
御摺物細工所
菊屋平兵衛

夜 六九